（城西人文研究第16巻第１号）

Dostoevskij の小説における思想上の傾向

ヴント・シュテファン

この論文のタイトルは『Dostoevskij の小説における思想上の傾向』であるが，私はこの大きなテーマを限定しておきたいと思う。つまりどのようにロシア正教が Dostoevskij の想像力を動かしたかということ，そして彼が小説の中でいかに無神論と悪と超人と未来の社会そして共産主義の問題を論じたかということに。そして彼の思想が伝統的に安定している人間をゆりうごかし，自分の本来の自我を捜すことをうながしたかということに。

Dostoevskij は Turgenev ときわめて対照的である。Turgenev の小説の中のばらの香りとナイチンゲールの鳴き声に，大都会のむっとする悪臭とほこりと悲惨さを対立させる。Turgenev の人物はある決まった限界を越えないが Dostoevskij の場合にはたびたび平均的な人間が急に意外な発展をする。つまり老 Karamazov は最初に単純なおろか者あるいはこっけいな者として，ようするにまったくつまらない平均的な人間として描写されている。しかしその姿はだんだん性欲の権化になって行く。Dostoevskij はいつも変人と奇人をさがし，常識と教養を認めないで，すべての限界を越える人間を作った。Dostoevskij の世界には白痴と聖人と殺人犯とヒステリーの女性と神秘的な悪魔が住んでいる。この世界では純粋は不純から，神聖は魂の傷から出て来る。愛は暴力によってふみにじられ，そして肉欲は束縛を脱っしようとする。Fëdor Michailovich Dostovskij（1821—81）は並みはずれた人生を過ごし，その経験を作品にとりいれたが，彼の作品はほかの視点から見ることがで

きる。

Dostoevskij の思想上の背景はヨーロッパに関連して彼が見ていたロシアの精神史である。『未成年』という小説の中で Vershilov が独仏戦争においてドイツ人はドイツ人そのものであり，フランス人はフランス人そのものであると言った。しかしロシアの人はすべての人間の兄弟として汎ヒューマニストでなければならない。ヨーロッパ人として人生の意味を尋ねなければならない。そして神の似姿によって自己を定義しなければならないと言った。 Pëtr 一世の残忍な改革にロシアは Pushkin の誕生で答えた。その汎ヒューマニズムはヨーロッパと共有の伝統に結びついている。十九世紀の始めには堂々とした Peterburg があり， Neva 川に Pëtr 一世の乗馬像がそびえ立っている。詩の中で Pushkin はそれを青銅の騎士と名づける。ある貧しい若者が若い女の子をすきになってしまうが彼女は洪水で溺れ死んでしまう。若い男はこの青銅の騎士を呪う。そしてその青銅の騎士は彼を人のいない夜の町で追い掛ける。

Pushkin のあとスラブ主義者と西欧主義者が出て来る。彼らはロシアは未完成な国だと思っている。Tolstoj が民族に根ざしていることも疑われ，いつも仮装する伯爵と考えられている。それに対してニヒリストの革命家がいる。彼らの思想を Dostoevskij はキリストなき徳と名づけている。そして自然科学は寓像崇拝に激しく反発している。父親と息子の対立，国家と公務員と進歩的な思想を持っている人々の断絶は非常に深くなり，おたがいの理解が不可能になってきた。そこで Dostoevskij は残忍な反乱を予見している。

1838年から Dostoevskij は Nikolaj 一世が建てた陸軍中央工兵学校にかよい，熱心に勉強したが軍隊の訓練には反抗した。卒業してから自分が自由と感じ，小説を作ろうとした。現実に魅了され，そして一番現実らしくないと思われたことが現実として見えてきた。最初に成功した小説は『貧しい人々』で，Belinskij がおどろきながら言った。「あなたが書いたことを自分でわかりますか？ あなたに真実は無償であたえられた」と。この小説の中に二つのテーマが交差している。若い時から男の欲望をよび起こし，結局は年とった道楽者との結婚生活に救いをもとめた貞節な Varja，そして Makar Devushkin の

話。この貧しい公務員は秘密の恋人を遠くから慕って彼女と文通している。この手紙に Varja の日記が付け加えられる。Devushkin はゴーゴリの『外套』の主人公を発展させている。彼は外套をなくしたことによって人生の意味をうしなう。ゴーゴリはこの主人公をできるだけグロテスクにそして滑稽に描く。一方 Dostoevskij にあって Makar Devushkin は滑稽ではなくて若者らしくそしてすこし感傷的な同情で見られている。すでにこの小説においてDostoevskij は人間の限界のところで実験をはじめている。

『二重人格』という小説の中で Dostoevskij は人間の単一性とその分解の可能性を問題としている。これらは同じ自我から解放されて独立に存在している。二重人格はとりわけ個人の社会的な失敗から出て来る。この小説の主人公は Goljadkin という下っ端の公務員である。彼の名前は空腹（golod）と裸(gol)から合成されている。彼は最下層の男である。Goljadkin の分身は成功と出世と権力の夢をあらわしている。他の存在がかけていることは Goljadkin の存在に分身がはいり込むことを許し，存在論的場所から彼を追い出す。この場所は人間の存在の必要条件である。

Saint Simon と Pierre Leroux と Louis Blanc を読んで，Dostoevskij はツアの暗殺計画をする Petrashevskij 集団の仲間になる。神と宗教を非開化論とやみと鎖と皮鞭としか理解できない Belinski の影響は始めは非常に強かった。ロシアの一番緊急の問題について二人は農奴の身分と体罰を廃止しなければならないという同じ意見を持っていた。Belinski が宗教と公式の教会の背徳を拒否したが，Dostoevski は自分の信仰を失わなかった。そして結局 Belinski からはなれて行く。

また一方 Dostoevskij の家族において宗教は大きな役割をはたしていた。彼の祖父はロシア正教の司祭であった。そのため Dostoevskij は若い時から福音書の深い知識をもっていた。家族は三位一体の修道院へ参詣に行き，断食の規則をまもっていた。Dostoevskij はとくに殉教者についての民族的な物語を聞いて感激した。しかし前述のように自由思想の影響によって子ども時代の宗教的世界をうしなってしまった。逮捕される直前1849年４月22日に教会にも

どっている。Pëtr i Pavel とりでに監禁された。12月22日に処刑されるはずであったが刑の執行の直前に Dostoevskij と彼の仲間は恩赦されている。それから4年間 Omsk の刑務所で，あとの5年間兵隊として Semipalatinsk で強盗殺人犯と放火犯と暴行犯といっしょにすごしている。10年間何も書かなかったが，1860年に Aleksandr 二世の寛容な治政のもとで Peterburg にもどってから『死の家の記録』を出す。それは追放中の生活についての冷静な報告である。とくに鎖につながれた仲間とずっといっしょにいるのはとても残酷なことと感じたのだが，その中にロシア民族の偉大さを発見し，そして根っからの犯罪者に獣性と神聖が同時に存在していることを発見している。神が彼をそこへ行かせたのは必要なことだったとその中で言っている。そこでそれぞれの強制された共同社会が何も人間的な価値を持たず地獄のようなものだとわかってきた。社会主義のユートピアは「死の家」を「死の宮殿」に代え，友愛か死を求める。しかし自由の決定を許さないことは人間の尊厳を傷つける。

大犯罪人は後悔を知らないで善と悪のむこう側にいると Dostoevskij はとても驚ろいている。道徳は弱いもののためにあり，何事も思いきってやってみる強い人間には何でもゆるされる。それを見ると Rousseau の自然な善性に対する確信はそれにたえられず，くずれてしまった。一方，限界以上に卑しめられた人々は苦悩のエゴイズムを保持している。受けた不公平を深く感じて，それは彼らの一部となり自分の苦悩を好むようになり，救いの道がなくなる。

1854年の Dostoevskij は冷静にそして控え目にみえる。彼は歩兵の赤いえりのついたねずみいろのオーバーを着ている。顔色は青白く，不健康で髪の毛は薄い金髪で，身長は平均より高い。彼の目は灰色でありとても理知的で人の魂に深く入り込んでいるように思われる。

Dostoevskij の初恋と情熱の対象は Marja Dimitrievna Isaevaである。彼女は死病にとりつかれている貧しい大酒飲みの Isaev という公務員と結婚していた。しかし彼女は地獄から逃げてきたようなこの人間に対して無限の同情を感じている。1857年の2月6日 Dostoevskij は Marja Dimitrievna Isava と結婚する。Dostoevskij の癲癇発作は，彼女が敏感であったため彼女

をノイローゼにしてしまった。彼らの結びつきは七年つづいた。その最後の年 Dostoevskij は病人のベットからはなれられなかった。彼らはお互いに不幸であったが，不幸であればあるほどそれだけしっかりと結びついていった。Marja は Dostoevskij の理知的な面を愛していても，エロス的な面では彼をもとめなかった。しかし Dostoevskij は情熱的気質によって激しい要求を抱いていた。彼は Marja を暴力的に征服し，彼女の愛を強要したのであった。そこで彼らは深く離れ離れになり，彼らの関係はこのような葛藤を背負うことになった。亡き Marja の姿は『卑しめられたと侮辱された』という小説で魅力的な Natasha の表情に見い出され，『罪と罰』では Katarina Marmeladova が完全で残忍なそして苦悩に満ちた，人間的な現実における Marja をあらわしている。

Dostoevskij の人生において Anna Snitkina との出会いはもっと大きな意味をもっている。彼は締切までに『賭博者』の原稿を完成させるために速記者をさがしていた。胸をときめかせながら Anna Snitkina は Dostoevskij の前にあらわれる。45歳の彼はすでに異常にやつれきったように思われた。一ケ月後彼は年とった芸術家が若い女性に会うという小説を彼女に聞かせ，その場合において心理的に愛は可能であるかとたずねた。その時彼女は「私でしたら，私はあなたを愛します，そして一生愛しますと答えるでしょう」と答えた。彼らは1867年2月15日結婚し，Dostoevskij はようやく完全に幸せになった。

本当の愛は犠牲と断念によってのみ可能であると Dostoevskij は考えている。愛され，自分と違っている人間に献身することによって命が永遠になる。一人の人間に関心を持ち，そしてその存在はほかの存在と一つになる。アダムとイヴの堕落で男と女の統一はこわされ，そしてその対立は解けない矛盾となるが，対立する極端が集まり，調和を作り出すことができる。愛は非合理であるから人生の意味を問うより人生そのものを愛さなければならない。そこで初めて人生の意味がわかるようになる。人間は性を定められているが，愛の中に男性的なそして女性的な精神的要素を認識し，ただの生理的なものから区別し

なければならない。その調和の障害はノイローゼを呼び起こす。Fëdor Karamazov は永遠の女性的なものではなくていやらしい女性をさがしている。女性の体だけで興奮する。また『罪と罰』の中の Svidrigailov は Dunja に対して押さえられない情熱を感じ，彼女の人間性と心と性格を愛する能力を失ってしまっている。洋服の音，体の動きが彼をとりこにし神経を参らせる。Lisa (Elisabeth は神を尊敬する人という意味である）は生とつながりを失った Stavrogin を愛と献身で救おうとするが，Stavrogin といっしょにすごした夜は彼の心の完全な虚無を明らかにする。『永遠の夫』の中では二人の主人公は女性的なもののとりこである。両方の男は自分がひとりの女の所有者と主張している。一方は他方の中に自分の破滅を鏡の中のように見る。絶えることのない脅白が愛人を破滅させ永遠の拒絶が夫を破滅させる。

愛は同情か欲望から生まれる。同情は肉体的な要素をとって，人間をゆがめるが欲望はまた燃え上がり人間を破滅させる。献身と犠牲だけによって愛が実る。Sonja は Raskolnikonv のために，Grushenka は Mitja のために，Sophie は Vershilov のために犠牲になる。完全な自己否定で不幸な男たちに身をささげる。そこで女に愛された男は彼女の子どもとなる。みごとな芸術で Dostoevskij はやさしい女性の典型を描いて見せる。これらの女性がいなければ人生は耐えきれない。ここから打ち負かすことのできない力が湧いてくる。そしてすべての苦しみと戦う覚悟ができる。本当の愛は所有と欲望を越えて情熱的で無我である。女性問題のあやまりは分割不可能の分割であり，男と女を別人として見ることである。しかし男と女は有機体のすべてであると Dostoevskij が言っている。ロシアの聖人伝によると男の悪が男性的なものでも女性的なものでもなく，二つの物が一つになってしまうと天国が来るという。Dostoevskij の小説の女性の名前はよく Sophia と Sophie であり，ギリシア語で知恵という意味であり，彼女たちは神の知恵にむすびついている。彼女たちの美しさは肉体的ではなくてむしろイコーンの美しさである。この美しさは人を当惑させ，そして Fëdor Karamazov のような放らつな人間には耐えきれない。売春婦の Sonja という逆説的なきわどい人物は完全な献身で

まもられている。

1859年に Dostoevski は兵役をしりぞき，Tver へそれから Peterburg へ行き，そこで文学的な論文を発表する。その頃の彼は口髭しかはやしていなかった。そして大きな額とりっぱな目にもかかわらず小市民のように見える。夜から朝5時か6時まで仕事をして午後2時まで寝る。1860年にある夢について話している。東に満月を見た。その満月は三つの完全に同じ部分に分かれ，そしてそれからまた一つになった。それは三回繰り返された。それから「Da, Da」（はいそうです）という古いスラヴ語の文字で書かれた矛形紋章が東から西へと空をよこぎった。満月の円は永遠を象徴していて，一つになるそれぞれの部分が三位一体を意味し，それは宗教上の文字であらわらされている。その時に Dostoevskij は『地下室の手記』を完成している。この小説において Dostoevskij は恐ろしい監禁状態をいわゆる自由な世界に見いだし，そして慣習の鎖と習得した公式は囚人の鎖よりおそろしくて重いと言った。人間は中庸を奇妙に尊敬する。なぜならばその中に保護とすべての不安から逃げる方法を見つけるからである。しかし異常なことを望まない神は神ではなく，ただの偶像であると Dostoevskij は思っている。理性で求められた壁は自然科学的な法則から論理的に発生した。そこに Dostoevskij のいわゆる確率への反発が始まる。結局証明によって達する確率は計算の結果であり明証が欠けている。それに対して明証はいつも啓示である。だからもっとも明白なものは例えば光や自意識が一番分かりにくい。なぜならば証明が必要ではない。明白な自由は差し出がましくなくて人間にはふさわしい。しかし人間は神の問題の明白さから道徳的な公理，防壁それどころかアヘンを作ることも自由である。Dostoevskij は神秘主義者とたくさんの共通点がある。というのは彼は理性的な思考では宗教な実体がまったく理解できないと考えているからである。そうすると Dostoevskij のパラドックスはもっとわかりやすくなる。なぜなら人間的な証明ではなくて，証明できない無条件の明白さを選んでいるからである。

1864年に Dostoevskij の妻が死んでそして三か月後弟がなくなった。Dostoevskij はどんなにあやしげな債権者に対しても責任を取る。そしてその義務

を果たすために外国へ行った。そして身寄りもなく一人で残されたが，新しい生命力で生きようとする。

有名な小説の時代はさしせまったできごとの時とかさなる。たびかさなる差し押さえの危険，いつもの金銭欠乏，悪魔的なとばく熱。1862年と1863年と1865年は彼はたえず旅行中であった。Paris, London, Mainz, Geneve, Firenze。神曲と Hamlet と Faust とイタリアの聖母マリア像とゴシックの大聖堂と Beethoven の交響曲をとてもよく知っているが，自分の時代のヨーロッパは，つまり Flaubert と Ibsen と Baudelaire と Carlyle そして Nietzsche のヨーロッパは彼には跡を残さず表面的な影響さえあたえていない。Wagner の音楽と Manet と Cezanne の絵には興味を持たなかった。彼を感激させそして自分の意見に多くのニュアンスを付け加えることができる作品を奇妙にも彼は通り過ぎてしまう。

ジャーナリストとしてほとんど一時的な，直接のできごと以外彼はほとんど見ていない。Konstantinopel と西洋の教会とアジアとロシアのメシア主義とドイツの外交についての彼の考えはその時のために書いてあるが，小説にはその話題をほとんど使っていない。ところが歴史は Dostoevskij の予言にとても正確に応じていることに私たちはとつぜん気がつくのである。彼は Marx よりもっとはっきり民衆の幸福について資本主義の夢の失敗を予言する。自由主義者は彼らの進歩についてのむだな話はもうすぐ終わるだろうと気がついていない。自由と正義のかわりに個人的打算への激しい欲望はすべての人間を捕らえるだろう。だれでも平和の続くことを予言するが，現代の道徳から大きな戦争が発生するであろう。この理由は Marx と違って思想的である。人間は実に兄弟にならないかぎりどんな概念的な主義でも富を公平に分けることができない。古代の奴隷が組織された大量奴隷化にかわるだろうと彼は考えた。

1865年11月に Dostoevskij は Peterburg に帰り『罪と罰』を完成した。すでに監禁の間に Dostoevskij は善と悪のむこう側に位置している人間から深い印象を与えられた。何でもゆるされるか，という問をたてる学生についての考えが形成される。Raskolnikov は幻覚的な大都市のもやの中で生まれた

巨大な人物である。棺の壁にかこまれたようなせまい部屋に彼は住んでいる。そして彼は恣意の限界つまり犯罪の権利を実験する。彼には宗教がない。そして自分を犠牲にすることは彼にとって意味がない。有益にほかの人を犠牲にすることができるかどうか，とむしろ考えている。年寄りの高利貸しを殺してから良心は声をあげ，実は老婆ではなくて自分自身を殺したのではないかと考える。夢の中でも Raskolnikov はくりかえし残酷に無言の笑っている老婆を見る。彼は老婆を完全に殺すことができなかった。彼女は死なずむしろ彼が死んでしまう。恐ろしいひものように流された血でいつまでも結びついている。それは完全な地獄である。Raskolnikov という名前は教会分裂か離散か孤独というロシア語の単語の raskol から来ている。この犯罪が彼を孤立させ，追放する。Sonja は宗教的な良心の声をあらわす。彼女は Lazarus の復活の物語を読んで聞かせる。しかしこれはまた彼の反抗を引き起こす。彼は Napoleon のような神人であるかそれともただの震えている生き物であるか，という問が Raskolnikov をかりたてるただ一つの力である。刑務所でも彼の良心は落ち着いているとシニカルに説明している。ただ彼の理論の中に小さな間違いが入っていると自覚していた。彼は神をすてたのだから超人 Prometheus のように運命の厳しい法則にしたがう。これは人間にそれぞれの障害を越えることは許すが，人間は運命の非合理によって打ち負かされる。罰による精神的な救いの可能性があるが，この小説の中に改宗や Happy End はない。そのかわりに無神論は人間の神格化に導くという思想を見つけることができる。しかし自分の恣意によって人間は異邦人となり，運命の暗い力にほんろうされる。

1866年に Dostoevskij はまた外国に行って前より激しいとばく熱にとらわれる。これは一瞬に集中する勝ちと負けの基本的な二元論であるルーレットの輪が回っている時に夢中になることであった。ある日彼は賭博で負けすべての金を失う。そして正教の祭司をさがしたが，あやまってユダヤ教会の玄関をたたいた。このショックでルーレットの熱がさめてしまった。

Geneve に行って世界平和会議に参加する。Bakunin を聞いて国際社会主義の指導者を観察し，無神論のあらわれとそれぞれの国家の崩壊におどろいた。

Dostoevskij の中にロシアの宗教的な使命への信仰が育っていく。そして肯定的な人間のすがたが彼の想像力をとらえる。『Idiot』の計画はだんだん現実的になる。この小説で Dostoevskij は完全な善人を描写したいと思った。しかし今までどんな作家でもそれに成功しなかった。Dostoevskij はドン キホーテは一番成功していると考えている。しかし，彼の小説の舞台はやみの世界であり Rogoshin の家の不吉な雰囲気である。Lebedev の反キリストの哲学博士は黙示録を解釈し，人類はすでに三番目の黒い馬の時代に入って来た，と言う。その騎士は天秤を手に持っている。人間は黄金の小牛を崇拝している。そしてコスモポリタンの証券取引所は世界の大聖堂のようにそびえ立っている。Myshkin は Hans Holbein の死んだキリストの絵の前に立ち，この絵を見るとすべての信仰をうしなわざるをえない，という思いに沈んだ。「Idiot」という言葉はギリシア語で特別か別種かあるいは異なっている存在という意味である。実際に Myshkin はほかの遊星から来た生物のようにふるまっており，すべての本当の実在が彼には欠けている。Myshkin は現実的ではない。存在の原動力を欠いている，そしてそのために本当の超越性から切り離されている。完全な異邦人としてどこにも根ざしていない。しかしこの小説の中にはだんだん Dostoevskij の西欧のキリスト教に対立するロシア正教メシア主義が出て来る。やみの世界では Myshkin の天使のような無邪気さが天国に通じない。彼は十字架を越える道を知らないからである。Myshkin の失敗は Dostoevskij の創作と人生に大切な段階である。

それから Dostoevskij は『悪霊』という小説で，たとえ話のように無神論を表そうとする。マルコ伝による福音書では悪魔がとりついた人間から去って，豚の群にはいる話がある。そこから小説の題名が成立した。現代の無神論は神の問題からはなれている。そして神が存在していないことは考えることの結果ではなく，考えることの出発点である。そこでは人間の存在しか認められない。神聖を汚された世界は存在するけれど形而上学的思弁が不可能になってきた。キリストなき文化によって方法論的な無神論は学問であきらかとなった経験しかみとめない。そのために自然と生体的な結びつきが解消されてしまった。

これは Dostoevskij にとって神からの分離のもっともおそろしい症状である。科学的な物を食べて，物質で構成され，そして速度で動かされている人間にとって聖体のパン，洗礼の水，塗油，生きている地球の養いの母として大地は無意味になってきた。社会学，心理学，力の強い貨幣経済，精神の衛生学は人間を本来の使命からきりはなし，宗教的な感情を代用し，神に対する欲求を押しつぶす。『悪霊』の中で無神論のいろいろなすがたが三人の人物によって示される。

Kirilov は生を越えて人間の神性の主権をさがしている。死によって人間は植物のような物に還元される。そのために人間は自分を否定しないように神を発明した。そうすると神が存在しなければならないが，神が存在することはありえないかという問題がおこる。しかし人間は自分の運命の神そして絶対の支配者になることができる。ちょうど自殺の瞬間に。生と死のはかり知れない境目にあっては Kirilov は実際に神であり生を越えて権力の神性の意識を体験する。そうすると彼の無意味の勇気は彼を神性の水準に持ち上げるが，同時に彼は自殺して生を否定し，自分の存在は神であるということを肯定した。

Stavrogin の場合は女性が彼の悲劇的仮面を反映する。女性は彼を救う可能性を持っているが，みんな彼の没落の原因になる。男性に対して彼は消極的な Faust の役割を演ずる。彼の思想はドラマになり運命になるが彼だけ動かない。彼の顔はすでにろうの仮面のように動かない。そして彼の体はいつも空の精神の死体を彼のうしろに引きずっている。それぞれの生の啓示にも，それは何のためだ，という虚無的な疑問をなげかける。もはや愛することができない心がもっともおそろしい無神論を示す。それは彼の死んだ心から生まれてしまった無信仰である。

そこで悪の三つの基本的なすがたが明らかになる。悪は自分の存在がなく，いそうろうとして生きそして神によって作られた人間の上に巨大な奇形を形成する。それは存在の仮面をかぶり，自分のおそろしい空虚をかくす詐欺師である。Dostoevskij はこの仮面をはぎ取って，悪そのものは貧しいということを表した。なぜ貧しいかといえば存在論的ささえを持っていないからで，夢と嘘

でくらし，そしてそれゆえ否定そのものである。現在の世界の神聖は汚されている。世俗化の悪魔的な要素と効果的にたたかうただ一つの方法は，重苦しくて耐えきれない退屈の正体をあばくことである。Dostoevskij によれば共産主義は宗教的な運動であり，物質を崇拝することであり，それによって新しいバベルの塔が生まれ，新しい宗教が作られる。奇跡と神秘と教会の権威がなければ人間は人食いに終わる危険性がある。

無神論は宗教よりもっと強く現われる，しかしの神の真理は極度の明証性を持っているから守ることが必要ではない，と Dostoevskij は感じていた。これによって小説の構成のあきらかなアンバランスを説明することができる。悪人は完全に場面を支配し，行動し，彼らは大声で議論しているが，善人はドラマのダイナミックな力に介入していない。彼らは表にたたないが，彼らから光が出て来る。罪は人間の無力を示し，そこで人間を全能の神の腕の中に投げ込む。それで Dostoevskij は弱い人間が持っている純粋に神を信ずる謙虚さの強い力を示す。神は父であるから人間が神を愛することを強制しない。しかし人間であるためには人間は神の子でなければならない。キリスト教の無比に偉大なことは父なる神と神の子供である人間の関係である。神の人間に対しての愛は人間の判断を越える。Tichon 主教はある日人間にあきらかになる神の道を表すためには言葉や比喩では不十分であると Stavrogin に説明する。彼は自分自身をゆるすように Stavrogin に忠告する。というのはその時に人間は自分が罪人であると認めるのであり，そして謙譲が神のたすけを可能にし，罪がゆるされる。人間が後悔するなら，神に許される。その考え方から Dostoevskij の天国と地獄の見解が出て来る。天国と地獄は褒美と罰ではなく，人間が自分で作った存在証明であり，そして人間の運命になる。それで Dostoevskij は内面の天国と，存在を越えている天国の愛を論ずる。愛は愛にふさわしいものを不滅にする。なぜならば人はおそらく永遠の存在を愛することしかできないからである。そしてその永遠の存在は神以外のだれもあたえることができない。人間の心は神の存在の強い証であり，愛の永遠の炎は人間の中に点火されているから神の存在によって不死になる。

Perov という画家が描いた Dostoevskij の最後のポートレイトがある。そこで画家は彼の精神の徹底的な活動をえがいた。体は緊張がとけ物思いに耽った姿勢で，目は心の中を見つめている。額が高くて，頬がこけている。彼の顔からは静かではあるが異様な力を持っているようすがうかがえる。

このかつての受刑者はツアーの宮殿に Pobedenoscev によって紹介され，Pavel と Sergej の教育をしたのである。たくさんの有名人は彼を訪問し宗教上の忠告を願う。予言者か Starec [主教] のようである。彼の晩年は深く祈るすがたがきわだっている。ほかの人に対しての態度はやさしかった。Staraja Russa の近くに家を買った。しかし気管の病気で毎年 Bad Ems へいかなければならなかった。1875年に『未成年』を出した。1877年12月『カラマーゾフの兄弟』を書きはじめた。1978年に Alësha という三歳の息子を失い，Optino 修道院を訪問する。小説の主人公を Alësha と名づけ，Sosima 主教の修道院のモデルは Optino 修道院である。

この小説は未完成でも Dostoevskij の人生の総合である。Mitja は Schiller に影響されたロマンチックな時代を代表し，Ivan は Belinski と友達ずきあい，つまり革命的な活動の時代を反映し，そして Alësha は結局宗教的改心のあとの Dostoevskij である。その三人の兄弟はみんな魂の中で父親の殺人に間接的に参加している。Mitja の混乱，Ivan のイデオロギー，そして Alësha の受け身は Smerdjakov の殺人を引き起こす。三人はそれぞれ苦悩のカタルシスを通り抜け，共有の真実の体験まで進んで行く。

これらの三人の兄弟の中に悪に誘惑された善の三つの段階を見ることができる。Mitja はうまれつきの感受性によって善を知っているが，それは思慮よりまさっているものである。しかしそういう徳は変わりやすいので，そのために彼はたえず善と悪の間をさまよっている。Ivan は Mitja の単純な信仰を拒否して人生の合理的な正当化をもとめている。Ivan の善は自発的な論理学である。信仰は道徳的な人生を概念から具体的に変えることができる。その対立の解決は善を愛として把握することである。そうすると存在と当為の矛盾がなくなる，そして人生の目標は目標そのものと一致して積極的な愛になる。

Dostoevskij は悪のいくつかの段階を描いて見せる。最初は情熱の混乱，それから愛なき義務の高慢，それから限りない横暴，そして悪魔的な狂乱である。これは悪魔につかれた絶望で終わる。

Alësha は信仰懐疑の試練を受ける。Starec Sosima の死んだ日，早すぎた腐敗によって彼はひどくふさぎこむ。Sosima は自分の復活を予言していたので Alësha は彼が詐欺師であると考えはじめる。Alësha は死者のミサの間に Sosima の部屋に行く。その時にあの小さな年取った Sosima は楽しそうな表情でなごやかにほほえみながら彼に向かってくる。カーナの結婚式の朗読を聞き，それに加わる Sosima をみる。棺にはいっても同時に両方の世界にいる。Sosima は信者であるから最後の審判にかけられないですぐ永遠の命をえる。それで Alësha の懐疑がきえた。

Dostoevskij は社会的な理想を個人的な道徳に引き下げたと Gradovskij 教授に批判された。しかし Dostoevskij はそれぞれ個人の精神的な完璧さが一つの国を作るただ一つの力であると答えた。すべての人のための教会のかわりに帝国のアリ塚ができた。ロシア国民は共産主義ではなくてすべての国民の教会の世界共同体に救いを見い出す。それは結局西洋と東洋のキリスト教的総合であると Dostoevskij は考えた。

1881年の1月の終わりに Dostoevskij の健康状態がだんだん悪くなった。彼の習慣はよく福音書の1ページを開くことであった。1月28日には使徒ヨハネのつぎのような言葉を読んだ：「今はそうさせてもらいたい。このようにして，すべての正しいことを実行するのはわたしたちにふさわしいのです」。この日に Dostoevskij ははっきり意識をいだきながら幸せに美しくこの世を去った。話によると彼はその時をとてもあこがれていたということであり，とてもよろこんでこの世を去っていったにちがいない。国中は故人について悲しみ，そして教会会議の代理人の Pobedonoscev は Aleksandr 三世につぎのように書いた。「彼は死んでしまった。そして彼はたぶん一人の偉大な説教者でした。だれも彼に代わることはできません。」

Dostoevskij にとって信仰は目に見えない神に向かうことであるが，しかし

この世では伝統的な形で崇拝することである。そして Dostoevskij は理論を持っていない。なぜならば信仰は純粋と素朴でなければならないからである。信仰は復活を楽しく待つことである。たとえばそれは Alësha が大地にキスする時の法悦か，カーナの結婚式の幻想のようなものであろう。Optino の修道院の影響も彼にはとても強かった。そして彼は教父と偉大な聖職者の行為を証明しようとした。神は来世から種をとってこの世界にまいた。そこですべてのこの世の生は来世にも存在しなければならない。なぜならばこの世の生の根源は来世にある。完成とは神が人間になることであり，そして人間が，人間の原形であるキリストによって神になることである。そこで神の恵みとは自然に対したり，超自然的になることではなくて，超自然に自然と一つになることである。人間は自分のために生きているのではなくて神性なる他のもののために生きるべきだと Dostoevskij は考えている。この他への愛から Dostoevskij の汎ヒューマニズムとロシアのメシア主義とロシア人がすべての人間の兄弟でなければならないという三つ思想が発展してきた。もちろんその友愛の基本は自由意志と精神的なものであるが，とくにこの思想は政治的になり，ロシアがすべてのスラブ民族の指導権力を持っていると見る汎スラブの運動に使われた。そのことは新しい時代の進歩的な人たちによって激しく批判された。そしてその批判の大きな理由は Dostoevskij の宮廷に対しての強い影響力であった。Saltykov-Schtschedrin は彼をただ「反動主義者の Dostoevskij」と言っている。キリスト教的隣人愛によっての全民族の友愛的連合を Lenin は非合理的なことと考えた。そして Dostoevskij の作品について次のように述べている：「私はそんなくだらないものを読む時間はない。」

Dostoevskij は読者にとってたびたびはっきりしないでわかりにくく見える。その理由は一部彼の小説の構造にある。彼の総合的な方法，すなわちヨブ記と黙示録と聖イサクと新聞の記事と犯罪と路上の場面が，一見するとつながりのない連続である。彼は読者に対して初めに事件の発端をおくことがない。前もって準備していない読者は，複雑なストーリーの混乱した網と結果の渦巻きに落ちる。その理由はまだかくされたままである。たびたびその混乱状態

は，物語がある他の［私］の口にゆだねられることによっても混乱し，［私］はおどろくのだが，苦労してもつれた糸をようやくほぐしてゆくことができる。小説の中には，ただほのめかされた秘密の関係が支配しまた謎のような人間の衝突もある。彼らはみなまだわからない目的に向かって努力し，奇妙な計画を持ち，すぐにはわからない思想にとりつかれている。彼らは何かをのぞんで，何かのためにたたかっているが読者はなかなかこの世界に入り込めない。Dostoevskij は論理的な年代順の小説を作ろうとしない。彼の技巧はストーリーとテーマの流れを合わせない事である。彼は出来事の過程を先取りする。そしてある時には読者の可能な反論を暗示しながら留保と譲歩をする。ある時にはとつぜん小説の流れをわざと挿話の場面と会話と不意の事件で遅くする。それは特に『未成年』と『カラマゾブの兄弟』の中にたびたびでてくる。何年間も作品の構成計画を持っていたという伝記的な証拠がたくさんある。かれは文学的な手段としてカタストローフを使っている。そのためすべての彼の変わりものの人物が体験する空想的な出来事は意味を持つようになる。そのカタストローフは小説の始めにすぐにほのめかされるか，あるいは小説の真ん中に突発的に生ずるか，あるいは結局最後に見い出されるか，である。

しかし Dostoevskij は古典的な描写の原則をつかわずイコーン的表現の原則をつかったのである。Dostoevskij は無神論に対して弁証法ではなくて生きているイコーンの顔を対立させる。『カラマゾブの兄弟』の中で Ivan は Alësha に言う，「私はお前の顔がすきだ。悪魔もお前の顔をおそれていた」と。しかし Dostoevskij の聖者はほとんどの出来事のダイナミックな力に関係がない。悪魔的な人間は行動にあふれている。一方 Dostoevskij は聖者の顔を書いて背景にある壁にかける。そうすると善は目に見えるような勝利を得ることができない。聖者はイコーンのようにこの世の夢の中では悪の活動に対してむだなものである。しかし聖者は人間を救うことと教化することができる。Dostoevskij によるとこの世の聖者の支配は天国から来る神権政治より先にあらわれる。そのためにすべての救いは修道院と修道院長の精神性から生まれる。人間に司祭のような本質を見つけることとキリストの再来を待つことをすすめ

る。そのため神が作った善人はイコーンのように神の似姿である。

しかし多くの研究者は Dostoevskij が宗教を告げる偉大な教師であるかどうかという問題を投げかけている。私たちは Dostoevskij を実験する自然科学者とくらべることができる。彼は人工的な生活環境を作って，そして何がおこるかと観察しながら待っている。彼の実験は愛と憎しみ，高潔と卑劣，善と悪，高慢と自虐が人間の魂の中に一緒に存在している，というところから出発した。そこで彼はいつもその主人公が対立するような特色が出て来る場面を作った。直観的に彼は何がおこるかわかった。めったに間違うことはなかったが，しかしたまにはありそうなことの限界を越えて，ただの心理的な空想にふけることに終わることもあった。そうすると彼はその主人公をまったく独特な一度かぎりのものとした。心的生活を分解して二重人格のテーマから私生児のテーマ，Idiot のテーマ，犯罪者のテーマ，罪人が聖者になるテーマ，心の中では罪人である偉大な聖者のテーマに進んで行った。彼は意識と無意識の対立する心的生活を遊び，人間の同一性と統一性についての観念をばらばらにした。彼の思想的真実もたびたびあやしくなる。キリストの信仰を持ちながらほかの人よりも深く無神論に入り込んだと彼は言った。真実の観念も破壊的に分解した。Svidrigailov は Raskolnikov と話ししながらほかの世界に論理的に連絡ができる可能性を論理的に認めなければならないと要求している。もちろん幽霊は病人の前にしか出て来ないが，それは幽霊がいないという証拠ではない。その同じ会話では永遠の命についての伝統的な思想をゆり動かす。永遠の命は理解をこえたすばらしいものではなく，ただ煙と蜘蛛がいっぱいの農家の部屋でしかないかもしれない。これは Dostoevskij の発言ではなく Svidrigailov に言わせたものであるが，このよう逆説な気がかりな言葉は作品全体に奇妙な雰囲気，精神的な不安，緊張と恐怖をあたえる。かれは不気味な病気である癲癇をある程度に神秘的な認識の源にしている。『白痴』の中に Myshkin 公爵はその発作について話している。その病気の発作の直前に幸福と認識と強烈な生があらわれるが，しかしこれはその発作の瞬間の前兆にすぎない。であるからこの異常な状態から一般的結論を出すことができない。しかし病気が病人にあ

たえる認識はそれでも正しくないこともしれないが，妥当性はありうる。あとになって健康の状態で発作の前の瞬間を思い出すと最高の調和と美しさが明らかになる。Dostoevskij にとってすべての対立と矛盾，対照と不和の止揚は最高の認識と真実である。このような対立はカオスのような状態ですでに人間の魂の中に存在している。このような魂だけが真実にたどりつくことができる。爆発的なカタストローフはすべての調和させるただ一つの道である。つまりそれは精神の癲癇である。そうして Dostoevskij は自分の一番個人的なそして一番深い体験から神秘的な教えを作り出した。それは小説のブツブツあわだつ混沌の原因であるかもしれない。物語における両議性と二重性と人物描写によって Dostoevskij は世界文学においてもっとも奇怪で，問題をはらんでいる作家の一人である。

参 考 文 献

F. Dostoevskij : Bratja Karamazovy. Karelskoe Kniznoe izdatelstvo Petrozavodsk 1970

F. M. Dostojewskij : Sämtliche Werke in zehn Bänden. R. Piper u. Co. Verlag München 1970

Fedor Stepun : Dostojewskij und Tolstoj. Carl Hanser München 1961

Adolf Stender-Petersen : Geschichte der russischen Literatur. München 1978

Wolf Düwel : Geschichte der klassischen russischen Literatur. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1965

Valentin Gitermann : Geschichte Russlands. Frankfurt 1975

Paul Evdokimov : Gogol und Dostoevskij. Salzburg 1965